

巻頭ルポ

県産材の 今を探る

その地名にも表れている通り、
緑の資源が豊富な青森県。

青森ヒバをはじめ、

南部アカマツ、スギなど

雪国の住宅建築に好適な樹種が

近隣の山々に育っています。

その県産材を使用した住宅が

今、注目されています。

それとともに、その貴重な資源を守り、
育てていこうとする活動も

近年、活発化しています。

県産材を使うことで

どんなメリットがあるのか、

そして、それに携わる人々の想いとは―。

そんな県産材の現状を
レポートしました。



香り高く、美しい青森ヒバ 先人から受け継ぐ宝の木



青森県の山々には、1軒の家を建てるのに必要な木がすべて育っている。それほど豊富な樹種に恵まれている「青森」。中でも、全国的に知られる木は日本三大美林の一つ、青森ヒバだ。香り高く、美しい、本県の特産樹種である。価値ある銘木だけに、以前は年に10万立方メートルもあった伐採量が最近では1万立方メートルにまで減少し、深刻な局面に直面している。再び豊かな「量」を取り戻すためにも、100年の長期的観点に立った施策と同時に、ヒバだけでなくブナやミズナラなどの樹種がバランスよく生育していた昔の山の姿へ戻していく取り組みが求められている。

昔は、山は木材の生産の場として捉えられていた。それで、生産性を重視して、伐採後には生長の速いスギを全国の山に植えてきたものだが、山は、二酸化炭素(CO₂)を吸

収してくれるだけでなく、きれいな水を供給してくれる水源だという地球環境保全の観点から、浄化機能を持つ森林が大きく見直されるようになってきた。

土砂流出などの災害に強く、多様な生物が棲息していたのが、50年ほど前の本来の山の姿である。その山に戻すため、スギ主体だった従来の森林整備から、民有林を対象として青森ヒバを主体に人工造林を推進させていくことが必要とされている。

青森ヒバの天然林のほとんどは、国有林にある。その8割強にあたる蓄積量1274万立方メートルが、本県の津軽・下北地方に分布している。この量は35坪の家が約33万戸建つ分に相当し、木曾ヒノキの約3倍、天然秋田スギの約10倍に相当する。

課題は、人工林だ。天然林の枯湯が叫ばれている木曾ヒノキや秋田スギには、それを力

バーする人工林が育っている。これに対して青森ヒバは、その取り組みがようやく緒についたばかりである。先人から受け継いできた青森ヒバが「宝の木」として次世代へ引き継がれていくためにも、100年の大計に立って昔の山に戻す森づくりを推進しなければならぬ。

伊勢神宮建替えに採用へ

腐りにくい特性 抜擢

青森ヒバが銘木であることを知らしめる出来事が、伊勢神宮(三重県)の建て替え工事に使われることが決定したのだ。2013年の「式年遷宮(しきねんせんぐう)」と呼ばれる20年に一度の建て替えに採用されることになったもので、従来は長らく木曽ヒノキが用いられてきたが、天然資源の減少を背景に、優れた抗菌性や耐水性を持つ青森ヒバに白羽の矢が立った。青森ヒ

バが使われる部分は、社殿土台や屋根、橋板などで、全体木材使用量約8500立方メートルのうち約15%に当たる。

弥生時代を起源とする建築様式「唯一神明造」を受け継ぐ伊勢神宮の「式年遷宮」は、20年に一度、天皇が執り行う。天武天皇の時代に制度化した祭事で、隣接地に神殿を造営し、旧殿から神体を移す。前回は1993年に第61回の遷宮が執り行われた。2013年の建て替えには総工費約550億円が見込まれている。

腐りにくく、狂いが少ない特性を持つ青森ヒバは、これまでも国宝の中尊寺金色堂や、国重要文化財の岩木山神社楼門などに使われてきた。加えて、2000年の建築技術を今に伝える由緒ある伊勢神宮に「抜擢」されたことで、全国的な消費拡大につながる事が期待されることから、人工林育成の継続的な取り組みが求められるのだ。



長い年月を経て高木良材へ生長する

北国の風雪に耐えて育つ 北方型ヒノキアスナロ

県民にはお馴染みのヒバではあるが、植物分類学上や生態のこととなると、身近ではない。

ヒバは、ヒノキ科アスナロ属の針葉樹。日本列島の特産品で、北海道南部の江差地方から九州の大隈半島に至るまで日本全域に分布し、栃木県

日光周辺を境界に、南方型と北方型とに分類される。南方型がアスナロで、北方型がアスナロの変種のヒノキアスナロ。この二つを合わせて一般にヒバと呼ばれる。

青森ヒバとは、北方型のヒノキアスナロのことだ。アスナロに比べ、北国の風雪に耐えながら高木良材に生長するところが特質だが、それには長い年月がかかる。年平均の肥大(直径)生長量が0.23、



ヒバとスギの複層林

0・26センチ。直径わずか4センチの幼樹に生長するまで20年もかかるものもある。

これに対してスギの生長量は、育つ環境によって差はあるが、ヒバの約3倍。スギなら

直径80センチに生長するまで

100年だが、ヒバなら300年かかる。いま、伐採期を迎えているヒバの大樹は、

藩政時代に芽吹いたものなのである。

ヒバには、受粉とは別に、無性繁殖によって稚樹が育つという特性がある。これを「伏条」という。雪の重みで親木の枝が地上に垂れ、適当な表土に覆われると、そこから新たな芽が出て、育っていくという性質だ。

ヒバにはもう一つ、林の中に適度な暗さがないと育たないという特性がある。木には陽樹と陰樹があり、ヒバは陰樹。マツやナラなどの陽樹は日当たりの良い裸地に生えるが、ヒバは樹群に囲まれた林の中で、少ない光に耐えながら育つ。上木が枯れたり、伐採されたりして、林内に陽光が十分に当たるようになると、ぐんぐん伸びて、空いた空間を埋める大樹へと生長していく。

3月中旬。暗緑色をした青森ヒバの鱗片(りんぺん)状の葉裏に、雌花が小さく開く。そこに、黄砂のようにサーッと降りかかる雄花の黄色い花

粉。山奥で人知れず行われる受粉の光景である。

ヒバは、雌雄同株。黒紫色をした雄花は長さ3ミリ、幅2・4ミリで、それよりやや大きめの淡い黄緑色の花が雌花だ。この小さな雄花と雌花が、太古の昔から繰り返し行ってきた種の保存の儀式。受粉して成熟した球果から、10月になると種子が飛び散る。やがて林床から芽吹いたヒバが、長い歳月をかけて次代のヒバ林を形成していくのだ。



瑞々しいヒバの葉

100年物の南部アカマツ 曲がり物も梁に利用価値



長靴で分け入った林の奥に、見上げるほどのアカマツの大木が立っていた。幹の直径は目測で80センチ。ひび割れた分厚い樹皮に覆われ、地上約30メートルの高さへほとんど真っ直ぐに生長した100年物の南部アカマツだ。そこからやや離れたところにも同様の太さのアカマツが1本。その周辺にも1本。さらにまた離れたところにも1本……。大山重則社長(株)大山建工)所有のこの林は、7反歩の広さに100年物のアカマツが育っているアカマツ林なのである。

「数えてみたら120本あった。よく俺のところに来たな」
大山社長が幹に片手で触れながら、語りかけるようにつぶやいた。

そのアカマツ1本から、7コ口は取れる。1コ口は4メートルだから、7コ口は28メートル。伐り倒した1本のアカマツを、4メートルずつ

7回に分けて切り取れるほどの長さで太さがあるのだ。真っ直ぐのものもあれば、ゆるい弧を描くように曲がったものもある。利用価値があるのは真っ直ぐのものだけではない。曲がり物は、曲線の組み合わせが味わいを出す八角形の丸太梁になる。

「曲がった丸太の梁を、日本建築に伝わる伝統工法の『木組み』に生かして使う。いままでなら曲がったアカマツはチップ材にしかならなかったが、梁と梁を組む木組みの丸太梁として使うことによって、曲がり物に付加価値をつけたわけだ」

木は、職人の技術を育てる。技術は、さらに良い木を求める。地元の山に100年の歳月を経て丸く太く高く育った「素性」(すじょう)の良いアカマツは、磨かれた大工職人の「木づくり」の技によってその木の持つ美しさが引き出されるのだ。

加工センターで 自然乾燥させ 出番に備える

アカマツの山から車で数分ほどの近くに、大山社長が所有するもう一つの山がある。広さ4町歩。坪に直せば1万2000坪。4ヘクタールだ。さきほどのアカマツの山の約6倍の広さになる。

ナタを腰にぶら下げて先を歩いて行く大山社長が、いきなり、山道のかたわらに立つ太いスギの木に抱きついた。幹に回した両腕の手の指先



幹に両手を回して太さを測る大山社長

が、反対側でつながった。

「……ということとは、このスギの胴回りが1・8メートルだから、直径は約60センチだな」

算数の円周率だよ、と大山社長が笑った。左右に広げた両腕の長さが約1・8メートルだから、その長さ同一致する木の円周も同じ長さになるというわけで、円周が1・8メートルの円の直径は60センチになる。

直径が60センチに育った樹齢90年ほどのスギが、一列に並んで立っている。

「ここが縁(ふち)なんだよ、境界だな。こっちは昔植えたスギ、こっちは若いスギ、といった具合に見分けがつくように境界のところを一列に残しておくわけだ」

スギもあればケヤキもある。アカマツ、カラマツ、クリ、モミジもある。大山社長が、カマの刃先で引き寄せた腰高の木の先から、芽をひねるようにして摘み取った。タラの芽

である。次に引き寄せたのも同じタラの芽かと思ったらウドだった。

今度は腰を折って地面に群がる草を引き抜いた。根元がピンク色をしたミズだ。そのあたり一面がミズの群生地なのだった。

山菜採りを楽しみつつ、幹に絡みつく蔓を切ったり、木の様子を監察しながら歩いて行く。大山社長の山への接し方なのである。

山に育っているスギやアカマツは、大工の手で加工されて建築用材となる。その出番がくるまで、五戸町にある大山建工の加工センターの敷地内に積んで乾燥させておく。屋根の下にうす高く積み上げられた、ひと抱えもある丸太や、分厚い板は、アカマツだけでなくヒバもあればスギもくりもある。

重ねた木と木の透き間を通り抜ける風に2年も3年もさらして自然乾燥させるのだ。

こうして乾燥させた木材をストックしておくから、必要に応じてすぐ加工し、出荷できるのである。

フリーで 津軽海峡渡った 県産木材

加工センターからトラックに積み込まれた木材が運ばれて行く先は、県内だけに留まらない。今年(2010年)春に東京都内に約1年がかりで完成した現場へも、また夏に完成見学会を開いた盛岡の現場へも五戸からトラックで陸送した。東京の現場へ運んだのは木材だけではない。大工が一軒家を借りて自炊生活をしながら工事にあたった。今年の12月に引き渡した北海道の現場へはフリーで運んだ。津軽海峡を渡った青森県産材が、大山の大工衆によって北海道の地に建てられた。東京現場に続き北海道現場を仕切った棟梁の中里政義氏

が、南部アカマツについてこ
う話す。

「間取りが固まった時点で、太
鼓梁に使える曲がったアカマ
ツを山に探しに行く。曲がっ
た木はあまり重宝がられない
が、その曲がりをつまく使う

ことで建物の空間に味わいが
出る」

大山社長がこう付け足す。

「地元の山で育った木のクセ
を熟知し、うまく使いこなし
て、生かすところに職人とし
ての技が磨かれてきた。木造



加工センターで2年も3年もかけて自然乾燥させる



曲がった木もうまく使いこなすことで味わいとなる

建築は昔から大工によって引
き継がれてきた日本の文化な
んだ」

南部アカマツはスギに比べ
て、粘りがある。梁として
使うことが多いが、暴れが大
きく、組んでからも木が捻じ
れたり縮んだりする。梁を単
純に渡さずに、組むのは、アカ
マツのそういうクセを理解
し、捻じれることを利用して
交差部分の強度を高めるため
なのである。職人の技と、地域
の山で育った木で建てる地産
地消の家づくり。地元の工務
店だからこそ地元の木材にこ

だわるのだ。

「樹齢100年以上の原木を
山から伐り出し、作業場で天
然乾燥させて建てた家の柱や
梁は、時間が経つほどに良い
色に仕上がってくる。それが
暮らしたに味わいを添える」と
大山社長は強調する。

山から伐り出した木を大工
が技で生かす。伐っては植え
て、木を育てる。職人を育てる
ために新人を雇用する。育つ
た大工が会社を守る。地産地
消に取り組む会社が山を守る。
木と職人が地域を育てて
いく。

間伐で日光存分に浴びて育つ 樹高30メートルのスギの良木



林道を厚く覆った雑草が音をたてて車体をこすった。山林所有者の田中裕氏が、「つい最近草刈機で刈ったばかりなのに」と記録的な猛暑で伸びに伸びた草が道を埋めている様子に驚いていた。

「ここでちよっと待ってください」と田中氏が車から降りて行って、通せん坊をしているチェーンの鍵を外した。そこから先が『田中林業』9代目として先祖代々から監理を引き継ぐ田中氏の山林である。

広さ約175ヘクタール。隅から隅へと歩き回れば人間の足で一日は優にかかる広さだ。そこに、スギ（人工林）と、アカマツ、それにケヤキやナラ、クリ、センなどの広葉樹がほぼ3分の1ずつ育っている。

1ヘクタールあたりに植えるスギの苗木は3000本。間伐して、50年後には500本に、100年後には250本になる。100年間、その場

所で育ち続けて樹高30メートルに真っ直ぐ生長したスギが価値ある良木なのである。

スギの苗木を植えてから伐期を迎えるまで50年。その間に育てる経費は1ヘクタールあたり250万円かかる。それに対して、伐採したスギで得られる収入は3分の1以下。これが田中氏が訴える採算割れの現状だ。

スギの苗木が建築用材として育つまでに50年かかる。伐期を迎えたそれらのスギを500本合わせた価格が1本のケヤキよりも安いのだ。それが現状である。間伐されず、荒れ放題のまま棄てられている山が多いのはそのためである。手をかけた分が赤字になる。

放棄された山が増えるとともに、当然、樹木を生業としてきた林業も衰退した。9代にもわたって山林を監理している田中氏のような存在は、いまは稀となっているのだ。

「だからこそ、地産地消を進めなければなりません。地域の山の木を、その地域で家づくりに使う。木は近場で循環するのが一番いいんです。そうした自然な形態が地域を支えているということを再認識したいものです」と訴える。

雑草の奥へ長靴で分け入って行った田中氏が、林を指差して、

「ここらが平均樹齢110年のスギです。広さは全部で6ヘクタールあります。平均樹高は30メートル。良木のスギです」

間伐によって木と木の間隔が充分にあげられ、日光を十分に浴びて育った樹幹が、多少の風ではびくともしないしなやかさをみなぎらせて真っ直ぐ伸び上がっている。

太く、高いスギの良木がここまで育つまでには100年以上の歳月がかかっているのである。

上層が針葉樹 下層が広葉樹 豊かな林床つくる混交林

そこから車で移動し、一層深く草に埋もれていて見えない作業道を奥へ進んで行くと、さきほどの三角形のかたちをして上へ伸びるスギ林とは趣の異なる、枝を横に広げた樹形の広葉樹林が広がっていた。

車を降りた田中氏が、「あ、これ、ケヤキの子どもですよ」

そう言って、足元に目ざとく見つけたケヤキの子どもも草の底から選り出してくれた。周辺に生えているケヤキの母樹から落ちた種が着床し、芽を出して育っているのだ。

上層が針葉樹、下層が広葉樹の混交林——が田中氏が目指す山林の姿である。林の上方にはスギが高く伸び立ち、その下方には広葉樹の子ども



ケヤキの子どもを見つけ指さす田中氏

たちが育っている、という林の姿である。

「大人もいれば子どももいる。

老人もいれば生まれたての赤ん坊もいる。地面に落ちたばかりのドングリもある。いろいろな命が混じって育っている林こそ豊かな林床をつくる。豊かだからこそ木々が健康やかに育つ」

人間社会も山の木も同じなのだ。

使ってもらうには まず木を 知ってもらおう

田中氏が、『三八地域産産材で家を建てる会』の初代会長に就任したのは2003年。山林所有者や素材生産業（林業）、製材業、工務店、建築士らなど。川上から川下、までの関連業者からなるメンバーと連携し、地元の山に豊富に



山のシンボルとなっている樹齢約350年のアカマツの太木

育っているスギを主とする地域材の消費拡大に取り組んでいる。

この家づくり会の前身は『八戸駅に県産材のベンチを置く会』。スギやアカマツ、ケヤキで製作したベンチを東北新幹線の八戸駅構内や自由通路などに設置した。このベンチが県産材によるものづくりの始まりで、そこから家づくり会に発展した。

県産材を使ってもらうには、まず県産の木を知ってもらうと、八戸市内の繁華街や大型商業施設の敷地の一面を利用して『県産材フェア』を開催。スギやヒバ、アカマツといった樹種の見本を展示したり、木造建築の「継ぎ手」の仕方を会員の大工棟梁が実演したり、県産材を使って建てた新築現場を案内する住宅見学バスツアーを開催したりと

意欲的に活動を展開している。

「やったからといって、すぐに需要が増えるわけじゃありませんけどね。続けているうちに、関心のある人の意識にだんだん入り込んでいくんだと思うんです。母樹から地面に落ちた種みたいだね」と田中氏は笑う。

最近、県南地方では『県産材使用』を「売り」にする工務店が増えてきている。その傾向は歓迎しながらも、田中氏は、

「無垢の木は乾燥すればある程度は割れるものだということをきちんと伝えることが大事」と話す。

もちろん多少割れが入ったからといって耐久性に何ら影響はないが、それ以上に、無垢の木には、室内の湿気を吸ったり吐いたりする調湿機能が備わっていることが大きな特徴なのである。

「そつ」いうことを自然に触れ

合いながら知ってもらうためにも、中学生にこの山で森林教室を開いて教えているんです」

木だけでなく、人を育てる地道な活動も行っているのだ。

この山のシンボルだというアカマツの太木へ、田中氏が案内してくれた。

樹齢約350年。胸高直径（胸の高さで計測する幹の太さ）は1メートル50センチ。途中から二股に分かれた幹が互いに寄り添うように高く伸び上がっている。

「東北新幹線の八戸駅から馬淵鉄橋を渡って、最初のトンネルに入ってから7秒経った地点の真上がここなんですよ」

田中氏はそつ言っ、胴回りが4・1メートルもある太いアカマツの幹に片手を添えながら、頭上40メートルの天を覆うように枝を広げている梢を仰いだ。